

発行前から大注目の話題の本 『淡水魚の放射能』

はどんな本になるのか。



水口 憲哉 1941年生。原発建設や開発から漁民を守る「ボランティアの用心棒」として全国を行脚し続けている。著書に『釣り人としての魚の科学』、『反生態学』、『魚をまるごと食べたい』、『海と魚と原子力発電所』、『魔魚狩り ブラックバスはなぜ殺されるのか』、『放射能がクラゲとやってくる 放射能を海に捨てるってほんと？』、『核鱒の棲む川—クラマスよ故郷の川をのぼれ』、『食品の放射能汚染 完全対策マニュアル』(共著) など多数。千葉県いすみ市岬町在住。資源維持研究所主宰。農学博士。東京海洋大学名誉教授。

●2011年3月の東電原発事故から17ヶ月たった。原発が爆発して放射能がまきちらされた事実はとれだけ日数がたつてもかわらない。しかもまだ出ている。それなのに政府は原発をなし崩し的に性懲りもなく動かしたがつていいる。

●地球規模で見れば、人類は核を手にして以来地球上にせつせと核汚染を積み重ねてきた。冷戦時代の核実験ブームによる汚染、広島・長崎の核爆弾、1986年のチェルノブイリ原発事故、各国の原子力施設による汚染など、地球はあまねく放射能に汚染されてきた。――(編集部)



『淡水魚の放射能』の資料の一部。図版を多くして分かりやすく、雰囲気は楽しくしたい。すこしでもたくさんの人に手にとっていただける本を作りたい。

美しい自然のなかに身をおいて、自らも自然のなかの一部である意識することに喜びを見いだす釣り人と、自然の営みを分断して破壊する原発が相いれるはずはない。(編集部)

――これらの汚染により、これまでの日本でも放射能は「測れば出る」状態だった。それをもって、福島事故より前から核の汚染はあったとしたり顔して語る人もいる。

原発事故前の2009年と、原発事故後の2011年の首都圏の土壌放射能汚染を比較したデータがある。おおざっぱな比較だが、東京都でセシウムが308倍、千葉県で978倍、埼玉県で261倍(環境省および放射能防衛プロジェクト資料から)である。

福島原発事故は大したことはないとか、これから先もたぶん大丈夫とか言う人は、チェルノブイリ事故の数年後に子どもらに起こった悲惨な被害を見たことがない方か、見たくない方か、ねつ造された情報にしか接していない方ではないだろうか。

福島原発周辺の汚染とチェルノブイリ原発周辺の汚染を比較すると、チェルノブイリで住民が強制避難させられたのと同レベルの汚染地域に、福島では今も人が住んでいる。その裏側には、福島原発事故はなかったこと、にしたいという政府の意思が見える。

釣り人と核は似合わない

釣り人の視点から原発――核を見るところか。

釣り人は美しい自然のなかに身をおいて、そこに息づいている生命――虫や魚とあそび、自らも自然のなかの一部である意識することに喜びを見いだす。

そんな釣り人と、自然の営みを分断して破壊する核が相いれるはずはない。まれに、原発の廃水口でデカイ魚が釣れるんだよ、などと自慢する人がいるが、哀れというほかない。

東電原発事故による淡水魚と川と湖の釣りにまつわる放射能汚染関連年表

2011.3―2012.6 (編集部作成) 主にフライの雑誌社のウェブサイトにメモしてきた事象をまとめた。

2011年

3月 「放射能を海に棄てないでください」(水口憲哉)を本誌HP上に無料公開。

4月 「放射能に汚染された魚介類から身を守るために」(水口憲哉)無料公開。

水口氏「いまはまだ食物連鎖(栄養段階)のどこかか。これから始まる水産物の放射能汚染の序ノ口にすぎない」。

5月 13日 福島県鮫川アユ、ヤマメ、松原湖ワカサギから放射性セシウムを検出。淡水魚のセシウム汚染が分かったのはこれが初めて。19日 福島県伊達市ヤマメ990ベクレル/kg、阿武隈川ヤマメ620ベクレル/kg、イワナ350ベクレル/kgなど淡水魚の汚染が続々と判明。

6月 16日 汚染発覚を受けて福島県阿武隈川のアユとイワナが出荷停止。淡水魚の出荷停止はこれが初めて。採捕自粛要請により釣りも禁止。同日、飯館村・真野川ヤマメ2100ベクレル/kg、ウグイ2500ベクレル/kgなど。27日 阿武隈川のアユも出荷停止。「放射能に立ち向かうために知っておく

こと」(水口憲哉)を本誌第93号に掲載。

7月 28日 芦ノ湖、赤城大沼、中禅寺湖のワカサギからセシウム検出。

8月 サンデー毎日「放射能を溜め込む森林」特集。

9月 「放射能汚染時代の魚の選び方 国が決めた基準値を疑え」(水口憲哉)を本誌第94号に掲載。『食品の放射能汚染 完全対策マニュアル』(水口憲哉、明石昇二郎編)を宝島社が発行。すぐに品切れとなり大増刷。

11月 1日 水産庁釣り人専門官がメールマガジンで「フグの食中毒に気をつけましょう」。12日 山梨県西湖のヒメマス釣りが自主検査。セシウム13ベクレル/kgを検出。24日 水産庁釣り人専門官がCS釣りビジョンで「フグの食中毒に気をつけましょう」。29日 山梨県が西湖、本栖湖のヒメマス、精進湖のワカサギからセシウムを検出と発表。

12月 本誌第95号に「東電原子力発電所事故・放射性物質検査で釣り人の声が行政を動かした」記事を掲載。7日 水産庁釣り人専門官「フグの食中毒に気をつけましょう」。

2012年

1月 本誌が日本野鳥の会へ取材。「野鳥への汚染の影響は現在調査中。風評被害が起きては困る。会としてメッセージを出す予定はない」。後日、日本野鳥

6月14日、川崎市の多摩川河川敷から27000ベクレル/kgのセシウムが検出されたと発表された。多摩川は市民のいこいの場である。子供が走り回り、家族連れがパークューを楽しんでいるその場所が、じつは放射線管理区域なみの汚染地帯だとわかったというわけだ。

『淡水魚の放射能』は読みやすい

すでにお伝えしているように、フライの雑誌社ではこの夏、単行本『淡水魚の放射能』を発行する。著者は

の会が電力会社から多額の寄付を受けていることが判明。26日 本誌がHP上で「フグ毒ばかりではなくて漁業者と釣り人から今求められている仕事があるのでは」と釣り人専門官を批判。

2月 フライの雑誌社が新刊『淡水魚の放射能』を発表。13日 石丸隆東京海洋大学教授が日本釣振興会の講演で「東京湾の汚染はさほど心配はしていない」の意を発言。6日 福島県川内村のミスから2万ベクレル/kgを検出。

15日 水産庁釣り人専門官「フグの食中毒に気をつけましょう」。以下略。21日 神奈川県酒匂川の丹沢ヤマメから37ベクレル/kgのセシウム検出。23日 渋川市の利根川浄水場から4100ベクレル/kgのセシウム検出。2月中旬から東日本の各都道府県で淡水魚の放射性物質検査がいつせいに始まる。とくに解禁前のヤマメ、イワナの検査が多い。26日 本誌がHP上に「川と湖の魚の放射能汚染まとめ」を立ち上げる。東日本各河川・湖沼の淡水魚の放射能汚染数値をピックアップ。時系列で総覧できる。現在も更新中。

3月 福島・栃木・群馬各県で100ベクレル/kg以上のセシウムに汚染されたヤマメ・イワナ・ニジマスほか淡水魚が多数発見。そのため各地の河川湖沼で釣り解禁の延期処置がとられた。1日 本誌編集部が「キャッチ・アンド・



『淡水魚の放射能』の資料の一部。図版を多くして分かりやすく、雰囲気は楽しくしたい。すこしでもたくさんの人に手にとっていただける本を作りたい。

原発と環境の問題に40年近くわたって自らの身体をはって最前線に取り組んできた水口憲哉氏。チェルノブイリと福島事故の比較にはじまり、過去半世紀にわたって世界じゅうで行われてきた核実験と原発事故による生物の被ばく、イギリスの再処理工場による海洋汚染、福島事故による汚染の現状と今後の展開など。たいへん盛りだくさんな内容になりそうだ。

もちろん、気になる日本の身近な淡水魚の放射能汚染――ヤマメ、イワナ、ウグイ、アユ、ワカサギなど――についても、昨年から現在まで公表されている1000を超える淡水魚の放射性物質の検査結果を解析し、魚種ごとの汚染の中身と、いまの本当の状況、今後の展開を見とります。このような研究は日本ではまったくなかった。初めてのしごとだ。水口氏によると新しい発見ばかりだという。

多くの方に手にとっていただけるように、『淡水魚の放射能』はハンデイルを採用した。資料もイラストを多用して、できるだけ読みやすく編集したい。後頁に概略目次を掲載した。(堀内)